
勇者になれなかった男

ラーカー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者になれなかった男

【Nコード】

N8669Y

【作者名】

ラーカー

【あらすじ】

勇者を召喚する魔法で連れ去られる途中で捨てられた男は異世界でなにをするのか？
ちなみに作者は文才がありません。

prologue

僕はいつものように、学校からの帰り道に商店街を歩いていた。

賑やかな店先を眺めながら歩いていると、中学生とすれ違い

——引き寄せられた。

驚いて引き寄せられている方向を見ると、穴が開いていて、そこから見えない手みたいなのが僕と中学生を驚掴みにして引き吊り込んだ。

重力を感じない穴の中を引っ張られていると、見えない手がいきなり僕だけを投げた。

——重力の感じない得体の知れない穴の中でだ。

（あれ？これって最悪なんじゃ……）

どうすることも出来ずに、等速直線運動をしながら得体の知れない穴の中の壁にぶつかった。

prologue (後書き)

ノリで書いてしまった……。

後悔はしていません！

キャラ設定（一章までの時点）

ヤガミ トオル
夜神 透

男 17歳 高校二年生

身長は170cmくらいで、顔立ちは整っているほうだが、ボサボサの髪に、寝不足なのか目のしたに隈が出来ているためすべて台無しになっている（きちんと身なり等を整えると高確率で女性のハートを打ち抜く）。

基本的に連れ去られた時の制服姿で行動している。

身体能力は高く、壁を駆け上がることもできるほど。気配を消すのも上手い。

いきなり連れ去られたわりに、途中で捨てられた可哀想な男。勇者の召喚でのミスだとわかると「勇者になれなかった男」と名乗るようになる。

キャラ設定（一章までの時点）（後書き）

設定を追加するときに随時更新していきます。

episode 1

チュンチュン

「うーん」

鳥の鳴き声と暖かい日差しを感じて、目が覚めた。

「夢か？」

とりあえず、身を起こそうと地面に手を——つけなかった。

「へっ？」

我ながら間抜けな声をだして、落ちた。

「痛たたた」

どうやら木の上に居たらしく、地面が柔らかい土だったため、怪我をせずに済んだ。

もつとも痛いことには変わらないが。

身を起こして、制服についた土を払い、そしてこっちを見ていた女の子と目があった。

「……」

「……誰？」

「ノーラ」

「ノーラちゃんね」

「あなたは？」

「ヤガミ トオル
夜神透。透が名前な」

「そう」

「……」

なんなんだろうこの子は？

年はたぶん10歳くらいで、見た目は西洋の女の子で服装は巫女服をチャラくしたような服。

そこまではいい。

だが、身長のはある杖に装身具として宝石をいくつも身に付けている。

「ちょっと質問していいかなノーラちゃん？」

「ノーラ」

「？」

「ちゃんはいらない」

「ノーラ？」

「それでいい」

変わった子だな。何を考えているのかまったくわからない。

「質問は？」

「ノーラって、お嬢様なの？」

「違う」

「じゃあ、泥棒？」

「違う。魔術師」

「魔術師？」

「そう」

何を言っているのだろうかこの子は。

古臭い魔術なんてオカルトは遠い昔に、科学技術の発展により駆逐されたはずだ。

なのにこの子は自分が魔術師であることを微塵も疑問に思っていない。

子供の思い込みとは、また違う。

なんらかの根拠があるからこそ、その言葉には自信が溢れている。

「トオル」

「なに？」

「答えて」

ノーラは僕に杖を向ける。

「なにを？あと人に杖を向けたらいけないって、両親に言われなかったの？」

「親はいない」

「そりゃごめん」

「あなた」

一呼吸おいて、はっきりと告げる。

「あなたどうやって私の結界の中に入ったの？」

「結界？」

疑問に思っ て辺りを見回すと、地面にオカルトとしか思えない、魔法陣が地面のあちらこちらに、規則性が無いようで、規則的に描かれている。

「僕が木の上で寝てるのに気づかないで結界を張ったんじゃないの？」

とりあえずごまかしておこう。

「それはない」

「……はつきり言うね。理由は？」

「これは三年前に私以外が入れないように張った」

「……僕が三年前からずっと木の上にいるわけないか」

「そう」

「睨まないでよノーラ」

完全に怪しい者を見る目だな。

「答えて」

「なんで結界の中にいたかを？」

「話して」

……警戒心MAXだな。

「いや、僕もわからない。ていうかここ何処？」

風景的にはギリシャの遺跡みたいだけど、どうなんだろう。

「……」

ノーラは小首を傾げて、考え込んでいる。

杖は降ろさないが。

「《風よ刃となりて切り裂け》」

「はい!？」

ノーラが怪しげな呪文?を唱えたら、杖の先端から風の刃が襲いかかってきた。

「危ないな」

「!？」

余裕で避けると、ノーラの表情が驚愕で固まる。

どうしたのだろうか？

至近距離から放たれた岩をも簡単に切り裂く風の刃を避けたのが、そんなに驚くことなのだろうか？

「あなた」

「……」

「なにもの？」

何者って言われても……

episode 1 (後書き)

グダグダ

episode 2

とりあえず、自分の身に遭ったことを話してみる（プロローグ参照）。

自称、魔術師なんだ。原因がわかったら御の字だ。

ノーラはその話を聞くと、目を少しだけ見開いた。

どうやら、驚いているらしい。

「それはたぶん知ってる」

「どれ？」

「あなたが来た方法」

「ふーん。わかったの？」

「その前に一つ」

「質問かい？」

「（コクリ）」

だんだんこの子の扱い方がわかってきたな。

「あなた私のこと本当に知らない？」

「んー？名前はノーラ。職業魔術師。かわいい女の子。それくらいかな」

「……かわいい」

ノーラが小声で何か言ったが、小さすぎて聞こえなかった。

「ノーラどうしたの？」

「なんでもない」

「ふーん？」

なにかあるような顔をしているけど？

「それで僕が来た方法ってなに？」

「それは――」

少しの間ノーラは虚空に視線をさまよわせて、意を決したように言う。

「たぶん王家に伝わる勇者召喚の魔法」

……

「……………本当？」

「（コクリ）」

えーっと、つまり

「勇者として召喚されている最中に勇者じゃないと判断されたってわけ？」

「そうなる」

おいおいおいおいおいおいおいおいおいおいおい。
おいおいおいおいおいおいおいおいおいおいおい。

それはないだろう！？

「いやいや、無理やり呼んで、間違えたからって捨てないでほしいな……」

「私に言われても」

「じゃあ、ノーラに質問だ」

「なに？」

「ちよっと思っただが――」

できれば知りたくないが生か仕方がない。

「ひょっとしてノーラって王家に関係があるの？」

「ある」

「やっぱりか……」

「トオル」

「ん？」

再度杖を僕に向けながら聞く。

「私のことを知らないのになんでわかったの？」

「ん？ノーラって有名人なの？」

「（コクリ）」

「ノーラって有名人なのか……」

これからに影響しなかったらいいけど。

「答えて」

「なんで王家に関わっているかわかったわけ？」

「（コクリ）」

警戒心が強いな。

「いろいろ理由はあるけど、大ざっぱに3つ」

指を三本立てる。

「まず一つはその格好」

「格好？」

「ああ。最初に聞いた時にそんなにジャラジャラ宝石を身につけているのにお嬢様でもないって答えたからな。根拠としては弱いがつ目」

指を一本引っ込める。

「次は一つ目にもつながるが、自分の事を魔術師って言った。見たことはないが宝石に魔力が溜まり易いつて聞いた（本からの受け売り）が、一、魔術師がそんなに高い宝石を持てるわけがない」

仮に持てたとしても、丁寧に装身具として加工するほどの金はこの子からは感じられない。

ざっと宝石を見ても、純度が高く。下手すれば国宝級の価値がある。

「わかるの？」

「素人でもわかるレベルだ。一個人が持てないなら、後ろにでつかい組織または国が絡んでいるな」

また指を引っ込める。

「最後にノーラは『王家に伝わる勇者召喚』って言った」

「あ」

「勇者召喚は口振りから、極秘っぽいからそういつのを知っているならなんらかの形で王家に繋がりがあある」

最後の指を引つ込める。

「正確」

ノーラは杖を下ろしてから言う。

「で、詳細は？」

「私は宮廷魔術師」

宮廷魔術師ていうのは王家に仕える魔術師のことかな？

「私はその長」

「ノーラが？」

いや、それなりに高い地位にいたと思ったが、長とは、意外だった。

「いま疑った？」

「いや、驚いた」

後はこの世界の事でも聞こうとしたら、

『ノーラ様ーーーーッ!!!』

なんか大声が響き渡った。

episode 2 (後書き)

キャラがわかりにくいな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8669y/>

勇者になれなかった男

2011年11月27日15時56分発行